

平成 24 年度  
横須賀美術館 評価報告書  
(一次評価)

平成 25 年 (2013 年) 6 月  
横須賀美術館評価委員会



## I 美術を通じた交流を促進する

### ① 広く認知され、多くの人にとって横須賀市を訪れる契機となる

〔一次評価〕

達成目標	実施目標
B	A

【達成目標】年間観覧者数 103,000 人

〔目標設定の理由〕

- ・「横須賀市立美術館 基本計画」（平成 12 年 6 月策定）では、他の公立美術館の実績を参考に、施設の規模、本市の人口などを勘案し、年間観覧者数を 10 万人と予測しました。開館後は、その予測を年間観覧者数の判断基準としています。
- ・今年度の目標は、予算時には 100,000 人を見込んでいましたが、過去 3 年（平成 21 年度～平成 23 年度）の観覧者数の平均が 102,585 人であることから 103,000 人としてしました。

年度	平成 21 年度	平成 22 年度	平成 23 年度	平成 24 年度 (括弧内は、特別企画展込み※)
来館者数	224,729 人	231,826 人	224,109 人	242,229 人
観覧者数	98,738 人	100,033 人	108,985 人	97,535 人 (123,203 人)

※「70's 展」4/1-4/14 入場者数 5,920 人を除く。

〔一次評価の理由〕

- ・年間観覧者数は経済部が主体となって実施した企画を除き、103,000 人と目標設定しましたが、実績は 97,535 人で目標を下回ったため「B」評価としました。
- ・達成できなかった主な原因は、「国吉康雄展」に映画化の話が出ていたために、その話題性に期待していたが、映画化が延期となったために広報等で活用できなかったこと、また、「女性の情景展」の観覧者予測が甘かったことの 2 点と考えています。

展覧会名		観覧者予測	実績	達成率
企 画 展	正岡子規と美術展	3,500	3,466	99.03%
	国吉康雄展	16,000	13,309	83.18%
	ストラスブール美術館展	20,000	24,569	122.85%
	女性の情景展	16,000	10,327	64.54%
	朝井閑右衛門展	12,000	12,363	103.03%
	児童生徒造形作品展	15,000	14,090	93.93%
	日本の木のイス展	12,000	11,359	94.66%
所蔵品展		5,500	8,052	146.4%
合 計		100,000	97,535	97.54%

[特別企画展の評価]

特別企画展	会期	目標数	入場者数	達成率
ラルク・アン・シエル展	H24. 6. 9-7. 8	20,000 人	23,226 人	116.13%
70' バイブレーション展	H25. 3. 16-4. 14	20,000 人	8,362 人	41.81%
合 計		40,000 人	31,588 人	78.97%

(全体的な印象)

- ・「ラルク・アン・シエル展」こそ目標を上回ったが、「70' バイブレーション展」は、目標を大きく下回っており、集客を目的とした企画展としては、物足りない印象。

(試行により判明した課題)

- ・多くのお客さまが訪れた「ラルク・アン・シエル展」では、お手洗いや休憩所などが課題として浮き彫りになった。今後、集客促進を進めるのであれば、施設のキャパシティを考慮した検討が必要。
- ・また、「音」に対する苦情も多かったが、展示によるもの以上に、多くのお客さまが訪れたことによる影響のほうが大きかったと思われる。
- ・「70' バイブレーション展」は、入場者数が少なかったこともあり、特に新たな課題が見つかるようなことはなかった。

(アンケート結果) サンプル数 LeC展：1631 70's展：551

満足度	満足	やや満足	普通	やや不満	不満
LeC展	48%	37%	11%	3%	1%
70's展	38%	45%	13%	3%	1%

性別	男性	女性
LeC展	11%	89%
70's展	53%	47%

年代	10歳未満	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代以上
LeC展	0%	9%	49%	25%	13%	3%	1%	0%
70's展	0%	5%	8%	13%	27%	33%	12%	2%

居住地域	市内	県東部	県央	県西部	都内	その他
LeC展	5%	18%	6%	2%	28%	41%
70's展	32%	33%	9%	2%	17%	7%

来館回数	初めて	2回目	3回目	4-9回目	10回以上
LeC展	84%	11%	3%	2%	0%
70's展	62%	13%	7%	14%	4%

---

**【実施目標】** 広報、パブリシティ活動を通じて、市内外の広い層に美術館の魅力をアピールする。

---

**【目標設定の理由】**

- ・横須賀美術館は、企画展・所蔵品展の内容はもちろんのこと、その絶景のロケーションからも一度お越しいただければ、きっとご満足いただけるだけの魅力を持っていると考えています。当館の魅力は、本市の貴重な都市資源であり、これを有効活用することは、本市のシティセールスや交流都市の推進という観点からも重要になります。
- ・そのためには、市内外に積極的に情報を発信して広い層に美術館の魅力をアピールすることで知名度や認知度を向上させていくことが必要と考え、実施目標として設定しました。
- ・数値としては、過去3年（平成21年度～平成23年度）の無料での情報掲載数の平均が182件であることから200件を目標としました。

媒体	平成21年度	平成22年度	平成23年度	平成24年度
新聞	10件	40件	46件	50件
美術系雑誌	43件	38件	37件	26件
タウン紙	34件	20件	28件	31件
フリーペーパー		18件	6件	4件
情報誌（地域版）		5件	4件	6件
情報誌（全国版）	21件	18件	19件	19件
WEB	24件	15件	30件	40件
ファッション誌	4件	11件	6件	11件
機関紙（会員誌）	25件	13件	12件	13件
その他		8件	12件	7件
合計	161件	186件	200件	207件

**【一次評価の理由】**

- ・新聞、雑誌等の無料での情報掲載数は207件となり、目標を達成しました。
- ・有料での広報は次のとおり展開しました。
  - 京急線窓上及び主要駅（30駅）へのポスター掲出
  - 「ストラスブール美術館展」タウンニュースへの広告掲出、ポスティング
  - 「関野宏子展」幼稚園協会誌広告掲出料
  - 「女性の情景展」JR大船駅、鎌倉駅、北鎌倉駅、逗子駅へのポスター掲出
  - 「朝井閑右衛門展」JR鎌倉駅、逗子駅、戸塚駅、大船駅へのポスター掲出
  - 「日本の木のイス展」雑誌広告

- その他、以下のとおり広報活動を行いました。
  - 広報よこすかへの毎月の展覧会情報、美術館のイベント等の掲載
  - 市内施設（各行政センター、役所屋）へのポスター、チラシの配布
  - 京浜急行線近隣各駅へのチラシの配架（市内全駅、及び三浦海岸駅）
  - 宿泊施設や周辺観光施設へのポスター、チラシの配架
  - 福利厚生団体や宿泊施設と提携し、割引契約の締結
  - 市内外のイベント（カレーフェスティバル、日産スタジアムでの横浜F・マリノス戦等）への美術館ブースの出店
  - コンサートの開催
- 新たな情報発信のツールとして、平成24年10月から美術館公式ツイッターの運用を開始しました。約5か月でフォロワー数が500人を上回りました。
- 今後は、昨年度に引き続き、認知度の向上やイメージアップのため、市内外のイベント会場での広報活動や、ニュース記事となるための自発的な話題づくりが必要と考えます。
- 特に課題として、団体集客の推進、商業撮影の誘致活動の実施、フェイスブックの導入の検討、インバウンドの研究などを進めて行く予定です。

## ② 市民に親しまれ、市民の交流、活動の拠点となる

### 〔一次評価〕

達成目標	実施目標
S	A

【達成目標】市民ボランティア協働事業への参加者数のべ1,400人  
(事業ごとに加算、登録者・一般参加者を総合して)

### 〔目標設定の理由〕

- ・参加者数は「活動が活発に行われているか」「魅力的な活動を企画しているか」をはかるための指標の1つとなります。  
今年度の目標は、過去3年(平成21年度～平成23年度)の参加者数の平均が1,312人であることから1,400人としました。

### 〔一次評価の理由〕

- ・24年度ののべ参加者数は2,075人となり、目標を大きく上回りました。

(市民ボランティア協働事業への参加者数)

	プロジェクトボランティア		サポートボランティア		計
	登録者	一般参加者	登録者	一般参加者	
平成24年度	258	1,116	392	309	2,075
平成23年度	197	533	434	274	1,438
平成22年度	91	580	375	174	1,220
平成21年度	115	466	443	254	1,278

#### プロジェクトボランティア

- ・美術館のイメージアップと美術館の利用を高めるため、自らイベントを企画実施するボランティア。
- ・主な活動は、市民等が参加し楽しめるボランティアイベントの開催。登録者数43名(平成25年3月末現在)

#### サポートボランティア

- ・美術館が主催する活動を共感し、自身の知的欲求を充足しつつ美術館活動をサポートするボランティア。主な活動は、ギャラリートークの実施。ワークショップや観賞会の補助。登録者数30名(平成25年3月末現在)

〈プロジェクトボランティア〉

- ・開催時期や、海の広場の立地条件を考慮した企画が、たくさんの人が集まるイベントの魅力につながっています。
- ・24年度は、年3回（ゴールデンウィーク、夏、冬）イベントを実施しました。
- ・GW・夏のイベントが自由参加型だったため、昨年度に比べて、一般の参加者数が倍増する結果となりました。
- ・企画側が経験値を積み、小さな子どもでも参加できる内容の工夫や、気軽に参加しやすい運営方法を取り入れたことが、参加者数の増加につながっています。
- ・季節を問わず、海の広場を用いたイベントについては、市内の子どもを持つ家庭に定評があり、すでに恒例行事として定着していると考えられます。

〈サポートボランティア〉

- ・経済部イベント実施のために所蔵品展ギャラリートークの開催回数が減少（48回→42回）したにも関わらず、一般の参加者数は増加しています。
- ・鑑賞サポートボランティアの第3期生を募集し、7名の応募がありました。
- ・障害児者ワークショップ「みんなのアトリエ」の補助に対しては希望者が多く、このしごとのみを希望する人もいます。ワークショップの性質上、同時に参加できる人数には限りがありますが、できるだけ多くの方に参加していただけるよう調整を行っています。

---

**【実施目標】** ふだん美術館に関心を持たない層を含めた市民が、美術館に親しみを感じ、訪れる機会をつくる。  
市民ボランティアが、やりがいを持っていきいきと活動できる場を提供する。

---

**【目標設定の理由】**

市民感覚を持ったボランティアと協働することにより、市民にとって親しみやすい美術館により近づくことが可能となります。また、美術館への親しみ、愛着を持ったボランティアの方々を架け橋として、より広い層の市民に美術館の魅力を知っていただく機会を増やしたいと考えています。

横須賀美術館のボランティア活動は労働ではなく、美術館の担うべき社会教育の一環です。ボランティアがそれぞれの創意と経験を活かし、仲間どうし協力し、美術館ならではの活動をしていくこと、そして、やがてそれが地域の新しいコミュニティとなることを期待しています。

**【一次評価の理由】**

〈プロジェクトボランティア〉

- ・「だれでもやることができる」「フリーで来ても参加できる」「美術館を活かした活動をする」という点に留意しながら、ゴールデンウィーク、夏休み、クリスマスに近い時期に、ボランティア自身が発案し運営するイベントを行っています。それぞ

れのイベントは地域の行事としてすでに定着し、市民を中心に多くの方が参加しています。

- ・GWのイベント（キャンパスのトンネル）では、布を張るための足場の組み立てについて、専門の業者に業務委託しました。外部委託の予算がついたことによって、実現できることの幅が広がり、ボランティア側の満足にもつながっています。
- ・イベントの参加者、特に子どもたちと交流を持つことが、企画するボランティアのやりがい、喜びの大きな要因となっています。
- ・活動に興味を持ち、企画段階から主体的に参加するボランティアが増えています。
- ・当日ボランティアを中心に、若い世代の参加者が増えています。
- ・イベントの運営について経験値が高まっており、準備や当日の進行がよりスムーズに行われるようになっています。

#### 〈サポートボランティア〉

- ・研修を月2回実施し、サポートボランティアとして活動するために必要な知識とスキルの向上に努めています。
- ・第3期生に対する研修を1月から開始しました。さまざまな研修を経て、25年7月ごろからは他のボランティアと同じように活動をしていただく予定です。
- ・研修の一環として、他の美術館や作家のアトリエを訪問するツアーを実施しました。24年度は、カサヤの森現代美術館、滝波重人アトリエ、朝井閑右衛門アトリエ跡などを訪問しました。こうした活動は、ボランティアならではの経験として、たいへん好評をいただいています。
- ・研修では、それぞれの企画展について、担当学芸員によるレクチャーを行っています。
- ・昨年度、交流の機会をもった川崎市市民ミュージアムのボランティアの皆さんと、情報交換をしています。
- ・ギャラリートークでは、当日の担当者間で取り扱う作品を分担し、それぞれ工夫した個性的なトークを展開しています。
- ・小学校美術館鑑賞会では、以前は1グループの引率には必ず学芸員1名を充て、ボランティアの方にはその補助をお願いしていましたが、今年度からは、学芸員の担当は各校1名とし、一部のグループの引率について、ボランティアの方にお任せすることとしました。負担は大きくなりましたが、責任感とやりがいをもって取り組んでいただいていると認識しています。
- ・障害児を対象としたワークショップ「みんなのアトリエ」の補助は、特に希望する人が増えています。

#### 【課題への取り組み】

##### 〔一次評価で掲げた課題〕

- ・鑑賞サポートボランティアについては、第3期の募集を行う。  
→鑑賞サポートボランティアの第3期募集を行い、7人の応募がありました。
- ・プロジェクトボランティアについては、引き続き新規募集を行い、活動への定着率

を高めるよう努力する。

→イベントごとに当日ボランティアを募集、また、チラシを配布するなどして、新規募集につとめています。入れ替わりはあるものの、新たに継続的に参加する人も増えています。

- ・新たなボランティア活動の展開を検討する。

→ボランティアの方のご意見をうかがいながら、ひきつづき検討しています。

#### 〔二次評価で指摘された課題〕

- ・プロジェクトボランティア登録 19 名、サポートボランティア登録 28 名であるが、さらに登録者を増やすための広報活動と、研修の充実をお願いしたい。

→今年度末時点での登録者数は、プロジェクトボランティア 43 名、サポートボランティア 30 名となりました。それぞれの方のご事情によって、活動の粗密や、入れ替わりがあるものの、全体としてはやや拡大する傾向にあるといえます。ひきつづき広報活動と研修の充実につとめてまいります。

- ・小学校 6 年生を対象とした美術館鑑賞会は、児童に美術を通して豊かな感性を育ませると共に、美術館に足を運ぶきっかけとなっている。今後も充実した取り組みをお願いしたい。

→特に児童数の多い学校では、すべての児童に目配りをするのが難しく、ボランティアの方の助けが重要となります。児童にとっても、ボランティアの方にとっても楽しく、充実した経験となるように注意して取り組んでいます。

- ・サポートボランティアが活動の際、揃いの T シャツなどを着用すると、士気を鼓舞し、達成感を促す効果を生むのではないだろうか。

→検討しましたが、実施には至りませんでした。

#### 【次年度への課題】

- ・プロジェクトボランティアについて、新規参加者の定着をはかります。
- ・情報発信のあり方を検討します。
- ・研修を通じて、サポートボランティアの能力のさらなる向上を目指します。

## Ⅱ 美術に対する理解と親しみを深める

### ③ 調査研究の成果を活かし、利用者の知的欲求を満たす

〔一次評価〕

達成目標	実施目標
A	A

【達成目標】 企画展の満足度（補正值）70%

〔目標設定の理由〕

展覧会を企画・実施することは、美術館にとって基本的な活動のひとつであり、中でも、年間6回開催している企画展は、波及効果が高く、最も力を注ぐべき事業といえます。こうした認識から、企画展に対する来館者の満足度を、美術館の社会教育機能の高さを示す目安の代表として掲げることとしました。

満足度は来館者へのアンケートによって算出しています。同じ方法の調査を継続的に行っており、過去の実績から、達成可能な目標として、70%を設定しました。

年度	19年度	20年度	21年度	22年度	23年度	24年度
企画展満足度	70.5%	76.0%	73.2%	78.7%	80.6%	80.9%

〔一次評価の理由〕

目標の70%を達成することができました。数値を年度別に比較すると、過去のどの年度よりも上回っています。「児童生徒造形作品展」を除いても、すべての展覧会が70%の満足度を超え、全体的に高い数字を出している点が特徴です。

企画展別にみると、「国吉康雄展」は、福武コレクションと岡山県立美術館のコレクションを中心に構成。根強いファンが多く、展示への期待や作品に対する満足度の高さが全体の満足度を上げていると考えられます。

「ストラスブール美術館展」は、フランスのストラスブール美術館のコレクションを中心とした近代美術展。ピカソ、ゴーギャン、シャガールといったモダンマスターへの関心の強さが満足度を上げたと思われます。市民割引も功奏し、市民率が高いことも特徴の一つです。

「女性の情景展」は、日本画、洋画、現代美術、雑誌など幅広いジャンルより作品選択を行いました。女性やファッションというなじみ深い題材から、女性を中心に高い満足度を得られたと考えます。

「朝井閑右衛門」展は没後30年を機に開催。美術館での久々の個展であること、横須賀美術館開館のきっかけとなった重要なコレクションを用いた展示であること

などへの期待が、全体の満足度を上げていると考えられます。

「日本の木のイス展」は、展覧会として取り上げられることの少ない、インテリアデザインの分野に焦点をあてた展覧会です。デザインや建築に対する関心の高い 20 歳～30 歳代に波及したことが、一定レベルの満足度を導いたと考えられます。一方で、日本の作例に絞ったことを惜しむ声も聞かれました。

毎年恒例となっている「児童生徒造形作品展」の観覧者の多くは出品された子どもたちの関係者であり、内容を批判する要素に乏しいことから、他の企画展と満足度を比較するには注意が必要です。年度ごとの「企画展満足度」を算出する際には、それぞれの企画展の観覧者数の比率を反映させています。

---

### 【実施目標】

- ・幅広い興味に対応するようバランスをとりながら、年間 6 本（児童生徒造形作品展を含む）の企画展を開催する。
- ・所蔵品展・谷内六郎展を年間 4 本開催する。
- ・大人の知的好奇心を満たし、美術への理解を深めるための教育普及事業を企画・実施する。
- ・所蔵図書資料を充実させる。
- ・多くの人が気軽に利用できるよう、図書室の環境を整える。
- ・主として所蔵作品・資料に関する調査研究を行い、その成果を美術館活動に還元する。

---

### 【目標設定の理由】

社会教育機関としての美術館は、常に知的好奇心を満足させる事業を発信し、また、そのための環境を整えていかななくてはなりません。

美術として扱うべき領域はとても広く、利用者の幅広い興味に応えるためには、所蔵品展以外にもさまざまなテーマを設けた企画展を開催する必要があります。作品の借用が許される期間に限度があることなどを考慮し、1 カ月半から 2 カ月程度を目安とした年間 6 本の企画展を計画・開催しています。

また、コレクションの魅力を紹介するために、所蔵品展および谷内六郎展を年間 4 本開催しています。

さらに、横須賀美術館では、美術への親しみ、理解を深めるために、講演会やワークショップなど、年間を通じてさまざまな教育普及事業を展開しています。子どもたち、あるいは障害のある方など、対象を限定したものについては別項にゆずり、ここでは、広く一般向けの教育普及事業について、評価の対象とします。

これらの事業を企画・実施するための基礎となっているのが、日々の調査研究です。その範囲は、所蔵作品に関することを中心に、広く美術に関すること、美術の教育普及に関することを含んでいます。

### 【一次評価の理由】

24年度の企画展は、日本近代美術の作家の個展、海外展、所蔵作品を生かした、横須賀ゆかりの作家の個展、絵画以外の領域で関心の高いデザイン展、など多岐にわたっていました。

「国吉康雄展」は、美術史的な評価は高いものの、一般的な知名度は必ずしも高くはないこの作家について、人物の魅力が伝わることを心がけました。読みやすさを重視したガイドブックを発行、また、アメリカで活躍したことが伝わるよう自筆の英語の文章を読解するワークショップを開催、さらに子ども向けの鑑賞ガイドを充実させるなど、工夫を重ねました。

「ストラスブール美術館展」では、フランス北東部のアルザス地域圏の都市ストラスブールにある近現代美術のコレクションを中心に、19世紀後半から20世紀後半の間に活躍した59作家83点の作品を紹介し、近現代ヨーロッパ美術の軌跡をたどりました。

「女性の情景展」は主題としてしばしば描かれる女性像を、「物語・歴史にみる女性」「モダンガール」「画家とモデル」「現代と女性」の4章に分け、洋画、日本画、雑誌や写真など様々な媒体から作品選択をしました。また、まんがコーナーを設け、手にとって読めるスペースを作りました。

朝井閑右衛門は、戦後20年の間横須賀市内の田浦に住んでいた横須賀ゆかりの画家です。「朝井閑右衛門展」では、横須賀美術館コレクションの中核ともなっている朝井閑右衛門作品を軸とし、各地に散在している代表作を集めて、改めて画業の全貌に迫りました。

「日本の木のイス展」は、時系列に配慮して展示作品を選び、インテリアデザインの歴史を大まかにたどれるよう配慮しました。加えて、地域の作家や産業にも目を向け、横須賀の作家や横浜のメーカーの協力のもと、実際に座ることのできるコーナーを設置。見るだけでなく体験型の展示を取り入れることで、観覧者が主体的に楽しめる空間が生まれました。また、生涯学習財団と連携し、市民大学の講座の一環としてナイトツアーを実施しました。“貸し切り”に近い状態での鑑賞で、参加者と学芸員とのじゅうぶんなコミュニケーションのもとで鑑賞ができました。

所蔵品展では、会期ごとに特集を組み借用作品も加えて、より魅力のある展示となるよう努めました。結果的に小企画展を行ったこととなり、総合で満足度が75.4%と昨年度より10%近く上がっています。

第1期では、「横須賀・三浦半島の作家たち」と題し、当館が収集してきた横須賀・三浦半島の作家の作品に加え、五島三子男、川田祐子、土屋仁応らの作品を特集展示しました。

第2期では、「ニョロの森－関野宏子の世界」と題した特集展示を行いました。関連企画として、プレ公開＋共同制作やワークショップを開催。作家の作品に加えて、参加者が制作した作品も展示しました。参加体験型の展示を行うことで、子供たちが美術館をより楽しめる工夫を施した展覧会でした。また、展示に併せて小冊子を発行しました。

第3期では、展示スペースの後半部分を使い、特集展示として「及川正通—イラストレーションの世界展」を開催しました。1970年代から最終号までの『ぴあ』の表紙絵約200点を中心に、及川氏の画業だけでなく70年代以降の日本の文化史を追体験できる構成を心がけ、観覧者が共感できる展示となるよう配慮しました。

第4期では「指先・ことばでつむぐ美術」と題し、視覚に障害のある人の美術観賞について考えるための展示を行いました。ふだんは触ることのできない彫刻作品について、学芸員のナビゲートのもとに触ってみる機会を設け、また、一部の絵画作品について「触察図」を用意しました。

谷内六郎館では、所蔵品展の会期と連動して、年4回の展示替えを行っています。会期ごとに、週刊新潮の1年分にあたる表紙絵およそ50点を順を追って展示しており、24年度は、1980年から1981年の表紙絵を展示したことで、開館以来、すべての表紙絵を一通り展示いたしました。第3期では「谷内六郎と海」、4期では「子どもの遊び」とテーマを立てて、展示をしました。

24年度の教育普及事業（一般向け）を一覧すると、下表のようになります。

いずれも規模は大きくありませんが、入念な準備によって、それぞれ充実した内容となっています。参加者と講師、主催者の距離が近く、より密なコミュニケーションが可能であることは、事業効果の高さにつながっています。

#### 講演会・アーティストトーク

タイトル	実施日	講師	定員	応募	参加
画家ヤスオ・クニヨシの生涯	5月19日	五十嵐匠(映画監督) 丸内敏治(脚本家)	70	—	40
ボンジュール、ストラスブール —その歴史と文化	8月4日	宇京頼三(三重大学名誉教授)	70	—	43
関野宏子アーティストトーク	8月25日	関野宏子(出品作家)	70	—	25
装いから読み解くモダン美人 —時代を映す、時代を開く	10月6日	児島薫(実践女子大学美学美術史科教授)	70	—	13
田浦の朝井閑右衛門	12月1日	原田光(岩手県立美術館館長)	70	—	38
対談・昭和の子ども —暮らしと遊び	3月2日	南伸坊(作家・イラストレーター) 小泉和子(昭和の暮らし博物館館長)	70	—	26
公開インタビュー: バタフライ・スツールの製作	3月9日	深瀬行正(株式会社天童木工ホームユース事業部部長)	70	—	35

#### 展覧会関連ワークショップ

タイトル	実施日	講師	定員	応募	参加
挑戦！英語で美術鑑賞	5月20日	ブライアン・ アムスタッツ(翻訳家)	24	34	24
閑さんのアトリエ探訪	11月23日	当館学芸員	20	23	20
つくってあそぼう！ マイおてだま	3月2日	前潟由美子 (昭和の暮らし博物館)	20	15	15
1/5スケールでつくる ミニチュア・イス	3月3日	白倉祥充(出品作家)	32	38	32
木のバターナイフをつくろう	3月10日	神永匡崇(出品作家)	32	36	32

#### オトナ・ワークショップ

タイトル	実施日	講師	定員	応募	参加
組む、編む：バスケットリー の世界から	5月26日	高宮紀子 (バスケットリー作家)	12	44	12
	5月27日		12	51	12

#### 映画上映会

タイトル	実施日	講師	定員	応募	参加
冬のシネマパーティー 『四つのいのち』	2月2日	キノ・イグラー (シネクラブ)	25	29	23
	2月3日		25	25	21

企画展・谷内六郎展に関連して、6回の講演会と、4回のワークショップを行いました。

ワークショップは、子どもを対象に行うケースも多いのですが、当館では特に大人の方を対象として「オトナ・ワークショップ」を例年開催しています。24年度は、バスケットリー（かご編み）のワークショップを行いました。

映画上映会は、「シネマパーティー」として恒例化しているイベントです。

それぞれの事業の基礎には調査研究があり、その成果の一部は企画展カタログをはじめ種々の印刷物等で発表しています。

図書室では、定期購読雑誌や作品集をはじめ、美術史・デザイン・建築・写真など、幅広い分野での美術図書、自館で開催する展覧会に関連する資料、児童書や絵本など

の収集に努めています。また、気軽に入ってこられ、のんびり過ごすことのできる環境づくりの工夫を重ねています。認知度向上のための取り組みも一定の成果につながっています。

### 【前年度の課題】

- ・解説などの工夫に加え、資料の調査・展示の充実をはかる。その成果は図録に反映させ、学芸員が論文を書く。
- 国吉康雄展では、既に数多くカタログが発行されていることを念頭に置き、持ち運びしやすいサイズで、図版は入れつつ、読み物的な内容の充実したカタログを学芸員が製作。好評を博しました。女性展では文学系の資料や写真、雑誌の紹介にも力を入れ、展示会、カタログの充実を目指しました。朝井展では、当館にとって重要であり、所蔵作品も多い朝井閑右衛門の新発見の資料展示や、さらに多くの資料を撮影し、映像で流すという試みも行いました。木のイス展では、地域の作家の掘り起こしや、建築に関連する初出資料の紹介もし、充実した展示となりました。
  
- ・幅広いテーマおよび観客を想定し、コンセプトを明快にした質の高い展示会及び教育普及事業を開催する。
- 海外展や近代美術の作家の個展などを行うと同時に、同時期に開催している所蔵品展において、親子向けの展示や、横須賀ゆかりの作家の紹介、展示などを行い、年間を通じて幅広い層の観客を想定した展示を開催いたしました。
  
- ・図書室の情報発信の充実
- まずは図書室の存在の周知に努めました。館内壁への追加サインが完成し、図書室までの動線が強化されました。利用者数は増加傾向にあります。  
『図書室の利用案内』ファイルを作成し、展示室内にあるベンチに置いています。ファイルの内容は、開室時間の案内や企画展関連資料や所蔵資料の紹介などで、定期的に入れ替えるようにしています。展示会後に図書室まで足を運んでくれる利用者が増えました。  
展示会毎に配架を替えている『展示会関連図書コーナー』にアイキャッチャー(書架見出し)をつけました。また、配架の入れ替えを行ったことをHP上で告知するようにしました。

### 【前年度二次評価における指摘事項への取り組み】

- ・アンケートのサンプル母数を増やしていくことが課題ではないか。
- 来館者に対するアンケート回収数の比率は、21年度には0.8%であったものが漸減し、24年度には0.6%強となりました。実数では1483件であり、少なくない数と考えています。今後は、減少傾向が続かないよう、年間1500件をひとつの目安として維持してまいります。具体的には、来館者が比較的多い日に、一定の時間に限り全員に配布するなど、作為的とならないように注意しながら、回答をお願いしていきます。

- ・音声ガイドやワークシートの活用など知的好奇心を満足させるためのアイテムの工夫を今後も検討してほしい。
- 国吉展では、来館の多いGWに作品について理解を深めてもらうための子どもセルフガイドを配布。答えた子どもたちには国吉のぬりえとパズルをプレゼントしました。ストラスブール展においては、昨年引き続き音声ガイドを行い、鑑賞ガイドも作成、配布いたしました。今後も、展覧会において好奇心を満足させるための方法を様々に検討していきたいと考えます。
  
- ・図書室の利用の便を図るためには駐車料の減免処置が必要である。1時間程度の無料化の検討をお願いしたい。また、夏休み期間中の利用者数が多い。学生が夏季課題のレポート作成等に利用するのであれば一部資料の貸し出しも検討してほしい。
- 駐車場の減免処置は美術館の施設を有償で利用した人へのサービスであり、無料で利用できる図書室は対象外と考えています。
- 美術館に併設の美術図書館と通常の図書館とは役割が異なります。美術図書館では、資料が常に在庫状態にあり、その場で閲覧、調査できることに意味があります。また、通常の販売ルートに乗らない展覧会図録や現在では入手不可の古書などは希少価値が非常に高いものです。貸出しによって紛失や破損の事故が起きることは避けなければなりません。かわりに、資料が必要な方のためにコピー機を置き、コピーし、持ち帰りができる機能をもたせています。
  
- ・展覧会関連のワークショップで、終了時に参加者の感想やアンケートの実施はなされているか。また、その内容から毎回ワークショップの費用対効果を考察すべき。
- ワークショップは、現場の様子からも、また過去のアンケート実績からも、全般に、参加者の満足度が常に一定レベルに達しているものと推測できます。このため、近年は、参加者の満足度を知る目的ではなく、時間配分や手法、難易度など、おもにプログラムの有効性を検証するためにアンケートを行っています。具体的には、新しい傾向のワークショップを行う場合などに限定し、アンケートを実施しています。
- 24年度まで、ワークショップは原則として参加費無料として実施してきましたが、「受益者負担」の観点から、25年度以降は、成人向けワークショップの一部において参加費を徴収することとしました。少人数に対する事業について、少額でも歳入を得ることにより、事業の費用対効果は向上します。そのいっぽう、費用を負担する参加者からは、よりいっそう、高い質を求められることとなります。

#### ④ 学校と連携し、子どもたちへの美術館教育を推進する

##### 〔一次評価〕

達成目標	実施目標
A	A

【達成目標】 中学生以下の年間観覧者数 15,000 人

##### 〔目標設定の理由〕

子どもたちが美術館に親しみを持ち、利用しやすくするためのさまざまな取り組みをしていますが、その成否は、実際の観覧者数に反映されるはずで、過去の実績を踏まえ、取り組みの工夫と強化で達成可能な数値として 15,000 人と設定しました。

##### 〔一次評価の理由〕

24 年度の年間観覧者数は 19,496 人（発券外観覧者を含む）となり、目標を達成しました。

（中学生以下の観覧者数）

	幼児	小学生	中学生	計
平成 21 年度	1,706	10,981	2,252	14,939
平成 22 年度	3,074	10,418	2,941	16,433
平成 23 年度	4,041	14,442	4,285	22,768
平成 24 年度	4,314	11,301	3,881	19,496

若年層に配慮した事業と、その PR 計画の成功が、目標達成につながっています。

特に、7~8 月の夏休み中に開催した「ストラスプール美術館」展では、市内の小中学校を通して全児童にチラシ配布したことが効果をあげたと考えられます。

また、子供向けワークショップや児童生徒造形作品の開催等によって、小・中学生の造形活動を支援しています。

鑑賞の面では、24 年度からの新たな取り組みとして、①すべての企画展で親子向けの展示案内（親子ツアー）を実施、②全市立保育園と連携し、出前授業を含む鑑賞プログラムを園ごとに実施、③小学校鑑賞会の充実に向けた、鑑賞会内容および教材開発のための教員との勉強会に参加、以上 3 つに着手しています。幼児の観覧者数の増加は、上記①②の成果が確実に反映しているものと見ています。

いっぽうで、「トリック&ユーモア展」、「集まれ！おもしろどうぶつ展」のような、子どもたちへの波及効果が高い展覧会のあった 23 年度に比べると、小中学生の観覧者数は 2 割程度減少していますが、過去数年度を眺めると増加傾向にあります。

経済部主導による集客イベントを開催するため、およそ 2 ヶ月の間、所蔵品展が空白

となったことについては、美術館を利用する学校団体から厳しい指摘をいただいております、今後の展覧会構成を考える上で考慮すべき要件と考えます。

---

### 【実施目標】

- ・学校における造形教育の発表の場として、児童生徒造形作品展を実施する。
- ・学校と緊密に連携し、子どもたちにとって親しみやすい鑑賞の場をつくる。
- ・子どもたちとのコミュニケーションを通じて、美術の意味や価値、美術館の役割などに気づき、考え、楽しみながら学ぶ機会を提供する。
- ・鑑賞と表現の両方を結びつけたプログラムを実施する。

---

### 【目標設定の理由】

美術教育は表現と鑑賞との両輪によってなりたつものですが、多くの学校教育現場では鑑賞の機会に乏しく、造形教育に偏りがちでした。

近年の年度にわたる学習指導要領の改訂にともなって、小・中学校における鑑賞教育がより重視されるようになってきています。23年度から実施された小学校の新学習指導要領では、鑑賞教育のために地域の美術館を利用することに加え、学校と美術館との連携を図ることが明示されています。

学校教育ではできない、美術館にしかできないことは何かをじゅうぶん意識しながら、鑑賞教室やワークショップ、作家との連携等充実したプログラムを企画、提供することによって、子どもたちが美術に親しみをもつ機会の拡充につとめていきたいと考えています。

### 【一次評価の理由】

- ・開館2年目の20年度から、市内の子どもたちの作品を一堂に展示する「児童生徒造形作品展」の会場となっています。学校・幼稚園と緊密に連携しながら、運営にあたっています。
- ・市内の全47小学校の6年生を対象として、「美術館鑑賞会」を実施しています。対応には学芸員と鑑賞サポートボランティアが複数あたり、ワークシートなどを利用して、鑑賞の楽しさを知ってもらえるよう努力しています。受け入れ側が経験を積むことによって、鑑賞内容も充実に向かっていきます。
- ・市外や私立の小・中学校団体に対しても、事前の相談を経て、注意事項についての話やワークシートの提供を行うことがあります。
- ・夏休みの時期にあわせ、「中学生のための美術鑑賞教室」を実施しています。参加は任意ですが、広報する地域を拡げたため、市外中学生の割合も増えています。
- ・「アーティストと出会う会」では、会場に作品を持ち込み、講師を囲んで、現在までの道のりや夢に向かう姿勢を語るかたちが人気を呼んでいます。
- ・子どもを対象とした普及事業に積極的に取り組んでいます。ワークショップをはじめとした造形活動のほか、野外映画会や、親子向けのギャラリートツアーなど、さまざまな方向性から、幅広く美術を楽しむ機会を設けています。

- ・鑑賞支援活動については、対象となる年齢層の幅を広げています。親子向けのギャラリートourを企画展ごとに実施したほか、市の保育課と連携し、市立保育園全10園に対し、出前授業と来館時の鑑賞プログラムを実施しました。

【次年度への課題】

- ・教員との勉強会を通じて教員との協力関係を強化し、鑑賞教材の研究や小学校鑑賞会の事前授業の試行など具体的な活動に取り組みます。
- ・保育園、養護学校、支援学級などを視野に入れ、対象に即したきめ細やかな鑑賞プログラムを実施します。

## ⑤ 所蔵作品を充実させ、適切に管理する

---

### 〔一次評価〕

達成目標	実施目標
—	C

---

### 【達成目標】(なし)

---

#### 〔目標設定の理由〕

購入費（基金）が充当されていないため、収集は寄贈に頼っている状況です。

寄贈される作品の質については、専門家による外部委員会である「美術品選定評価委員会」によってすでに保証されていますが、作品の収集は数量によって評価されるべきではありません。

作品の修復、額装等の処置についても、個々の事例に即して対処しているため、やはり数量的な評価に適していません。

作品の貸出は、依頼に応じて行う性格のものであり、また、作品保護の観点からも数量的な評価をすべきではないと考えます。

したがって、この項目では達成目標を設定しません。

---

### 【実施目標】

- ・収集方針に基づき、主体性を持って積極的な収集活動を行う。
  - ・適正な保管環境を維持し、そのチェックのため必要な調査を実施する。
  - ・計画的に所蔵作品の修復、額装を行う。
  - ・所蔵作品がひろく価値を認められ、他の美術館等が開催する企画展などに活用される。
- 

#### 〔目標設定の理由〕

すぐれた美術作品をひろく収集し、次世代に伝えてゆくことは、美術館の果たすべき基本的な役割です。そのために、保管のための適切な環境整備と、作品そのものの修復および保護を行っています。他の機関での展示等の所蔵品の活用は、作品への影響をじゅうぶんに考慮したうえ、可能な範囲で行っています。

#### 〔一次評価の理由〕

20年度以降、毎年50点を超える作品を受け入れています。24年度は寄贈64点を受入れました。作家本人、遺族からのご寄贈の場合、展示で活用してゆくために修復、額装が必要であるケースがほとんどです。また、短期間で多くの作品を寄贈によって受け入れることには、長期的にみたときに、コレクションのバランスを崩してしまう

おそれもあります。今後このようなペースで作品を受け入れ続けることは困難であり、より慎重な作品収集を行うべきと考えます。

なお、24年度の朝井閑右衛門展の開催に合わせ、朝井作品の購入予算を要求しましたが、最終的に予算が付かなかったため、購入することはできませんでした。

収蔵庫・保管庫について、昆虫類、菌類、気相についての調査（環境調査）を年度内に2回実施し、大きな問題のないことを確認しています。開館以来継続的に行っていることには、環境の長期的な変化を観察する意味があります。なお、今年度は特に、図書室の閉架書庫について、昆虫類と菌類についての調査を実施しました。

修復、額装は、企画展を開催するにあたり所蔵する朝井閑右衛門作品を集中的に行いました。また、近年の寄贈作品を中心に、必要な修復、額装を行っているほか、既存の作品でも画面への映り込みがはなはだしいものについては、アクリルやガラスを外して額縁改修を行うなど見直しを進めています。

所蔵作品の活用について、所蔵作品のうち14件（寄託作品を含む。）を他機関に貸し出しました。その中には初の海外貸出となるニューヨーク近代美術館への貸出も含まれています。この実績は、ある時期の美術の特色を映し出すすぐれた作品や、作家の画業を振り返る上で重要な作品が当館のコレクションに含まれていることを示しているといえます。件数から見ても、21年度実績の16件、22年度実績の12件、23年度実績の18件と同程度といえます。

以上により、例年並みの活動をしているといえますが、作品購入費の充当が途絶えている状況が解消されていないことから、一次評価を「C」としました。

#### 【次年度への課題】

- ・ 作品購入の必要性を説明していくと共に、財源についても一層の検討を進め、たとえ少額でも作品購入費が予算配当されるよう引き続き努力してまいります。
- ・ 収集作品を精選します。
- ・ 貸出作品の偏りを減らすため、所蔵作品の活用と周知に努めます。

### Ⅲ 訪れるすべての人にやすらぎの場を提供する

#### ⑥ 利用者にとって心地よい空間、サービスを提供する

〔一次評価〕

達成目標	実施目標
B	B

【達成目標】 館内アメニティ満足度 90%以上  
スタッフ対応の満足度 80%以上

〔目標設定の理由〕

館内アメニティ満足度については、来館者が気持ちのよい時間を過ごしていることを示す指標であると考えます。21年度から、アンケートのなかに質問事項を加え、「全体的にみて、館内では気持ちよく過ごすことができた」に対する満足度を指標（総合満足度）としました。24年度の目標は、過去3年間（21年度～23年度）の満足度の平均である89.2%を上回る90%としました。

スタッフ対応の満足度については、来館者アンケート「スタッフの対応・案内は適切だった」に対する満足度であり、過去3年間（21年度～23年度）の満足度の平均が78.5%であることから、80%としました。

〔一次評価の理由〕

館内アメニティ満足度、スタッフ対応の満足度は同水準で推移していますが、目標には到達できませんでしたので、B評価とします。

目標を達成できなかった理由としては、経済部主催のもとに開催した特別企画展と美術館の企画展とを同時期に開催したことによって大勢のお客様が訪れてくださり、エントランス、トイレなどが混みあったこと、「音」が響いて静かに鑑賞したいお客様のご迷惑になってしまったことなどが影響していると考えています。

	平成21年度	平成22年度	平成23年度	平成24年度
館内アメニティ満足度	88.7%	88.5%	90.4%	87.6%
スタッフ対応の満足度	79.0%	78.0%	78.5%	79.1%

---

### 【実施目標】

- ・ 建築のイメージを損なわないよう、じゅうぶんなメンテナンス、館内清掃を行う。
  - ・ 受託事業者と協力して、ホスピタリティのある来館者サービスを実践する。
  - ・ 受託事業者と協力して、付帯施設（レストランおよびミュージアムショップ）を来館者ニーズに応じて運営する。
- 

### 【目標設定の理由】

横須賀美術館が来館者に好ましい印象を持たれている大きな要因として、周囲の豊かな自然と、その風景と調和したユニークな建物があります。しかし、海のそばに立地していることから、強い風雨にさらされることも多く、また塩害によって老朽化の速度が進んでいることも事実です。建築の魅力をいつまでも来館者に伝えていくためには、適切なメンテナンス、清掃を継続していくことが重要となります。

さらに、ご案内をするスタッフの対応いかんによって、美術館に対する印象は大きく左右されます。受付・展示監視スタッフは受託事業者ですが、市職員との緊密な連携を図り、一体となって、来館者の立場に立ったより良い接客を目指します。

美術館体験のなかで、買い物や食事をする 것도、来館者の大きな楽しみです。やはり民間事業者であるレストランおよびミュージアムショップと連携し、来館者のニーズに即応したサービスの提供がなされるよう、知恵を出し合い、工夫を重ねていきます。

### 【一次評価の理由】

(メンテナンス)

- ・ 錆が発生し美観を損ねていた海側の庇とサッシュを、錆落とし及び再塗装しました。
- ・ 塩害による劣化が進行していた屋外ベンチ 2 基の撤去と、41 基の補修及び再塗装を実施しました。
- ・ 来館者の安全を図るため、美術館とバス停の間の樹木伐採を観音崎公園事務所に依頼しました。
- ・ 園路脇のロープの劣化が激しいため、ロープの張替えを実施しました。

(清掃)

- ・ 日常の清掃について、人員が必ずしも充分ではない（開館前 4 名・日中 1 名）ので、利用状況に応じて重点を移す効率的な清掃を心がけています。
- ・ 開館以来、清掃されていなかった、屋根裏の螺旋階段周囲を重点的に清掃しました。

(休憩所)

- ・ 繁忙期（GW・夏季）の休憩所を確保するため、山の広場に屋外休憩所（テント）を設置しています（20 年度以降毎年）。なお、強風等によりテントの劣化が激しいため、テント以外の方策を検討していきます。

(スタッフ対応)

- ・受付や展示監視に従事するスタッフは、来館者と直に接するためクレームの対象となりやすく、特に展示監視は来館者への注意なども業務として行うため、どうしてもクレームと切り離せない状況です。スタッフ対応に関わるクレームは現在でも年に数件はありますが、受託事業者の自助努力（研修、スタッフの入替など）や、館内における情報の共有化の促進によって日々改善の努力を続けており、21年度以降は満足度の数値も一定以上の水準に達しているといえます。
- ・運営事業者連絡会議の開催（21年度以降継続）  
→レストラン、ショップ、受付、展示監視、広報・総務・学芸の各担当が月1回集まり、館内で起こっている諸問題について情報共有、改善の提案をしています。  
24年度からは、新たに警備にも参加いただくこととしました。
- ・展示監視日報の作成（21年度以降継続）  
→情報共有、対応方法の指示をきめ細かに、リアルタイムで行うため、来館者からのクレームの内容、対応等の記録、報告を展示監視事業者に対して義務付けています。
- ・受付、展示監視研修の実施（22年度以降継続）  
→来館者対応のロールプレイング研修を実施しました。

(ミュージアムショップ)

- ・横須賀美術館オリジナル商品（エコバッグ、ボールペンなど各種）の作製販売や、季節に合わせて「日本手拭い」の柄を変える、また夏季に風鈴を販売するなど、満足度向上のための自助努力を継続しております。
- ・谷内六郎館内ショップ閉鎖（21年度以降継続）  
来館者数の減少に伴い事業者の要望を受け入れ閉鎖しておりますが、繁忙期は開店するなど臨機に対応しております。

(レストラン)

- ・運営事業者の自助努力（スタッフの充実、メニュー改善など）により満足度はかなり向上しています。満足の理由として多いのは、「質の高い食事」のほかに「景色がよい」こと。また、随時、メニューの見直しを行い、低価格帯メニューが豊富になったことで、過去に意見が多かった「価格設定が高い」という意見は激減し、ランチタイムの客数は目に見えて増加しております。その他、室温に対する不満（夏暑く、冬寒い）についても、空調機の増設（23年度）により解消されてきております。不満の理由としては、「長時間待たされる」、「混んでいて入れない」など利用したくてもできないケースへの意見が目立っています。
- ・企画展ごとに「コラボメニュー」を考案して提供しています。（21年度以降継続）
- ・混雑時の顧客のストレスを軽減するため、土日祝日については事前予約をとらず、先着順に対応。（21年度以降継続）
- ・混雑が予想される連休等にあわせて、ケータリングカーを誘致し、より多くの来館者に食事を提供できるようにしています。（20年度以降継続）

(災害時の対応)

- ・例年通り年2回の防災訓練を実施しました。24年度は避難誘導に重点を置きました。東日本大震災のあった23年度に較べると、訓練参加者の危機意識の低下が若干見受けられました。

(その他)

- ・混雑時の来館者整理のため、ベルトリールパーテーションを追加購入しました。
- ・社会情勢を鑑み、来館者に影響を与えない範囲で、節電を継続しています。

#### 【次年度への課題】

- ・来館者アンケートについては、今までの5段階評価に加え、特によかったところ、よくなかったところを具体的に記入していただく欄を24年度から設けました。また、他館のアンケートについて現在調査を行っており、よりご意見をいただきやすくなるアンケートにしていく検討を行っていきます。
- ・休憩所、特に飲食可能な場所の確保については、ハードにかかわることであり、長期的な課題として認識しています。
- ・美術館入口や順路が分かりにくいとの意見が寄せられているため、館内サインの見直しを継続します。
- ・災害発生時の帰宅困難者対策を検討します。

## ⑦ すべての人にとって利用しやすい環境を整える

### 〔一次評価〕

達成目標	実施目標
C	A

【達成目標】 福祉関連事業への参加者数のべ 400 人

### 〔目標設定の理由〕

過去 3 年（平成 21 年度～平成 23 年度）の参加者数の平均が 362 人であることから 400 人としました。

### 〔一次評価の理由〕

- ・ 24 年度の福祉関連事業への参加者数はのべ 229 人となり、目標に到達しませんでした。

（福祉関連事業への参加者数）

	平成 21 年度	平成 22 年度	平成 23 年度	平成 24 年度
講演会	27	35	22	29
ワークショップ	16	43	22	19
みんなのアトリエ	101	114	111	90
その他	250	347	0	91
計	394	539	153	229

- ・ 講演会やワークショップの参加者数は、ほぼ例年並みだったといえます。
- ・ 福祉パフォーマンスは、22 年度に企画し、震災のため中止していた野外音楽会をもとにして実施しましたが、例年のような参加者数を得られませんでした。企画展との関連性が失われ、周知を徹底しきれなかったことも原因のひとつと考えられます。
- ・ 第 4 期所蔵品展に関連して実施した「触察体験」の参加者を「その他」に加算しています。

【実施目標】 年齢や障害の有無などにかかわらず、美術に親しんでもらう（環境づくりの）ための各種事業を行う。

必要に応じて、対話鑑賞等の人的サポートを実践する。

### 【目標設定の理由】

- ・各種事業を通じて、美術館が健常者のみの施設ではないこと、障害の有無に関わらず美術を楽しむこと、また各年齢や状況に応じた楽しみ方があることを伝えていきたいと考えています。
- ・設備や什器を新規に導入するよりも、対話鑑賞のような人的対応を充実させることのほうが、福祉の充実につながると考えています。
- ・障害者のニーズを、職員が実践を通して知ることによって、次年度以降の取り組みや長期計画に活かしていきたいと考えています。

### 【一次評価の理由】

- ・障害児向けワークショップ「みんなのアトリエ」では、2008年の開催初年度から参加していただいているリピーターに加え、新規での参加希望者が5組以上増えました。チラシやHPでの広報活動や、参加者の口コミが広がっている表れと感じます。
- ・福祉講演会では、海外から講師を招き、視覚障害を中心とした障害者に開かれた美術館づくりについて、ケ・ブランリー美術館（フランス）の事例を紹介していただきました。
- ・福祉ワークショップでは、からだを動かすことを通じて、どんな人でも楽しく参加できるワークショップを実施しました。暗やみで、ライトなどの光源を手を持ってからだを動かし、露出を長くして撮影すると、思いがけないからだの動きがあらわれました。新聞でも紹介されるなど、好評でした。
- ・福祉パフォーマンスは、年齢、障害の有無を問わず参加いただけるよう、屋外での演奏会を開催しました。車椅子の方やそのご家族の参加がありましたが、参加者が実際に音を出して演奏に参加する場面が少なく、やや一方向的な演奏会となってしまったことは残念でした。今後同様のプログラムを実施する時は、パフォーマンスへの参加を促す工夫を行います。
- ・第4期所蔵品展では、視覚障害のある人の美術鑑賞について美術館として学んできたことの実践として、触角や聴覚、言葉による鑑賞を提案する内容の特集展示「指先、言葉でつむぐ美術」を行いました。あわせて、学芸員のナビゲートのもと、彫刻作品を手で触れて鑑賞するなど、触角による鑑賞体験の機会を設けました。（会期中の毎週日曜日 14:30 から。8回実施、29人が参加）

### 【次年度への課題】

- ・「みんなのアトリエ」についてはリピーターも多いため、新たな素材を取り入れるなどして活動内容を刷新し、参加者の期待を維持する必要があります。また、毎年3月にワークショップ室で行っている1年分の作品展示については、観覧者から好評をいただいているため、情報の充実を図るなど、広報活動の場としてさらに活用できると感じました。
- ・第4期収蔵品展 特集展示に関連して実施した触察体験では、健常者の方からは普段とは違う鑑賞となり肯定的な意見をいただきましたが、視覚障害を持つ方からは内容が不十分とのご意見をいただきました。今後、同様の鑑賞を行う場合、障害の

方へヒアリングする必要があります。

- 福祉パフォーマンスは、雨天など天候に左右されがちな屋外でのイベントにせず、館内で参加できるイベントにするなど、障害のある参加者の安全面も考慮に入れながら、魅力ある企画を検討します。
- 養護学校については、来校した2校から事前授業の依頼があり、好評でした。ただし、学校・学年によって障害の程度が大きく変わってくるため、入念な準備のうえ、前向きに事前授業の実施に取り組んでいきます。

⑧ 事業の質を担保しながら、経営的な視点をもって、効率的に運営・管理する

〔一次評価〕

達成目標	実施目標
C	B

【達成目標】美術館全体で年間に使用する電力量を前年比△5%とする

〔目標設定の理由〕

美術館は社会教育施設であり、収益をあげるための施設ではありませんが、公の施設として、効率的な運営が求められています。事業の質を担保しつつ、経費を削減するためには、管理部門での効率化を目指すしかありません。23年度に発生した東日本大震災に伴う電力不足以来、社会全体に節電が求められていることもあり、引き続き、年間使用電力量の削減を目標としました。

〔一次評価の理由〕

電気使用量は前年比1.4%増という結果となり、△5%を達成することはできませんでした。具体的な理由としては、以下のとおりです。

- ・23年度は東日本大震災の影響で最大限の節電を実施しており、利用者にご不便をおかけしている面もありました。(トイレのエアタオルの使用停止、冷暖房温度の設定など)
- ・24年7月から無理無駄のないスマートな節電を実施することになり、利用者にご不便をおかけしている個所の節電を一部解除しました。また、酷暑による夏季の電気使用量の増加が影響しています。

	平成21年度	平成22年度	平成23年度	平成24年度
電気使用量 (kwh)	3,049,128	2,946,360	2,525,376	2,559,600

【実施目標】職員すべてが費用対効果を常に意識し、効率的な支出を行う

〔目標設定の理由〕

サービスの質を低下させずに経費削減を目指すため、職員全員が費用対効果を常に意識した行動が必須であると考え、実施目標としました。

#### 【一次評価の理由】

事業を実施するに当たり、費用対効果を意識した仕様書の見直しを実施しました。事業者選定においても、複数業者から見積書を徴収し競争入札を行い、業務の質を担保しつつ最も少ない経費で業務を執行し、経費削減を実現しています。

具体的な内容の主なものは、次のとおりです。

- ・特に展覧会の委託関連の予算執行にあたっては、費用対効果の観点から委託内容を見直し、仕様書を再点検し、経費削減に努めています。
- ・事業者選定においては、定められた基準等により契約額及び契約先は入札によって決定することになります。24年度は、特定の業者でなければ実施できない業務を除き、基準外の業務でも見積合せを実施しました。この結果、事業の質を担保しつつ最も少ない経費で業務を実施できました。
- ・展覧会関連の出張については、宿泊経費がかからないよう出張経路を最短に設定し、旅費の経費を削減しています。
- ・事務用品に関して、在庫整理を行い、死蔵品を活用し、消耗品費の削減に努めています。

#### 【次年度への課題】

電力量の削減については、利用者にご不便をおかけすることのない範囲での節電に取り組んでいきます。

#### 【前年度二次評価における指摘事項への取り組み】

- ・達成目標を電力量の前年比とすべきではない。
  - ・達成目標を客観的基準に変更すべき。
- 職員全員で取り組むことができる達成目標を検討しています。